



ネットを利用したユーザ視点からの個人投資家サポート

株式のオンライントレードが活況を呈する現在、個人投資家も、自己責任による確かな市況分析が求められている。PC黎明期より、個人向け株価の分析ソフトの開発を続け、トップのシェアを守り続ける東研ソフト代表取締役・坂本正治氏に、インターネット時代の株式トレードの現状と未来をうかがった。



さかもとしょうじ
1948年生まれ。神戸大学卒業後、山一証券、日本マイコンを経て、82年東研ソフト設立。以来、投資関連パッケージソフトの開発・販売に専念する。

(株)東研ソフト 代表取締役

坂本正治

個人投資家のネットトレード参加で、リスクマネジメントの意識が高まってきている

金融ビッグバンを間近に控え、一般の方々の株式投資への関心が急速に高まっています。最近(2000年5月末現在)、IT関連株が急騰、そして急落とドラスティックな相場が続いています。このようなリスクの大きい時期にも関わらず、証券会社の営業マンとのマンツーマンのコミュニケーションの中で取引を行うのではなく、インターネットで気楽に株の売買ができるオンライントレードの利用者が増えてきているのは、なによりも一般の人々に、リスクに関する意識が変わってきているということを物語っているのではないのでしょうか。

このリスクに対する意識は、当然、個人レベルでその市場の分析のスキルを磨いていくということに他なりません。しかし、各証券会社のコンテンツを見ても、取引の指針となるようなデータが十分に得られるというところまでいってないのが現状です。JAVAを利用して、与えられた数値データをクライアント側で加工して、必要なデータを取り出せる仕組みも将来的には、もっと充実していくでしょうが、現段階では、弊社の「カナル」、「カナル2」などの専用

ソフトを利用の方が有効なわけです。

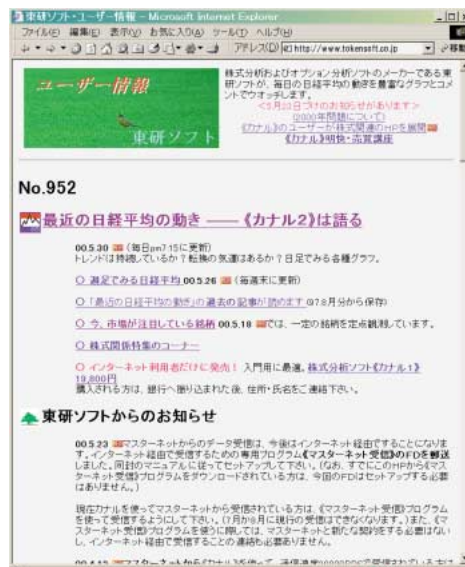
「カナル」は、まだインターネットがなく、パソコン通信時代から株価分析ソフトとして証券会社の営業の方から、一般のユーザまで幅広い方から高い評価を戴いております。

以前は、パッケージソフトとして、店舗販売が多かったのですが、現在は、インターネットによる通信販売がほぼ90%以上で、売り上げも昨年からは、10倍近くになりました。

毎日の市場動向を実際に分析してコンテンツにアップする

株価データをダウンロードして、ソフトで加工、分析するという基本コンセプトは、現在でもほとんどかわりませんが、今、最も求められているのは、実はそのデータの運用のノウハウをどうユーザに取得させていくか、ということです。オンライントレードのように、これまでいっさい株とは縁のなかった人々が、どんどん株市場に参加する時代。そういったきめ細やかなサービスがなければ、ユーザを獲得することはできません。弊社では、その日の株価の動きを実際にケーススタディとして、その動向がどのような意味をもつのか、それをカナルで分析することで、どういったことが言えるのか、そういったことを、コンテンツに日報として掲載することでフォローしていきます。株価分析のソフトは、今、過当競争の時代ですが、このようなサービスを行っているのは弊社しかないようです。

たしかに、毎日日報をアップする作業は大変ですが、結果的には電話やメールによるサポート件数が減少しコストダウンにも繋がります。また結果として多くのユーザが、実際にソフトの持っているポテンシャルの限界に近いところまで活用することになり、バージョンアップなどの時に、そのようなユーザの意見をフィードバックして、より使いやすいソフトに成長していくことができるわけです。現在、ソフトウェア産業は非常に厳しい状況にありますが、ユーザがソフトをどう活用しているのか、それをイメージし、その運用をどうサポートしていくのか、プログラム単体ではなく、もっとユーザの視点で考えていく必要があるのではないのでしょうか。



東研ソフト
ホームページ
トップページ
URL <http://www.tokensoft.co.jp>



株価分析ソフト
カナルを利用した
株価分析を実際の
市場の状況を参照
して解説する日報